令和３年度第２回県南広域振興圏地域協働委員会議　会議録

１　日　時

令和３年11月26日（金）　13：30～15：30

２　場　所

奥州地区合同庁舎分庁舎３階大会議室

３　出席者

（１）　地域協働委員

佐々木　　裕　委員、小笠原　　隆　委員、千　葉　　稔　委員、小　野　仁　志　委員、
堀　内　恵　樹　委員、長　屋　あゆみ　委員、南　洞　法　玲　委員、高　見　章　子　委員、
佐々木　勝　志　委員、安　倍　和　明　委員、千　葉　哲　夫　委員

（２）　県南広域振興局

佐々木局長、浅沼副局長、菅原副局長、髙橋副局長兼農政部長、佐藤経営企画部長、
熊谷特命参事兼産業振興室長兼産業振興課長、奥寺参事兼総務部長、千葉県税部長、
小川参事兼保健福祉環境部長、及川林務部長、佐藤土木部調整課長、木戸口花巻総務センター所長、
藤原一関総務センター所長、

４　議　題

令和３年度第２四半期までの重点施策の進捗状況及び令和４年度の重点施策の取組方針について

５　会議の概要

【佐藤経営企画部長】

資料№１、３により説明。

［質疑、意見交換］

◆基本方向Ⅰ「多様な交流が生まれ、一人ひとりが生涯を通じて健やかにいきいきと暮らせる地域」

［佐々木裕委員］

- コロナウイルス感染症の感染対策について、一生懸命やっていただいて、大きな波が岩手県を襲うようなことはなく、感謝申し上げる。
- ワクチン接種についても、市町村支援をしていただいて、遅れを取らずきちんと２回目まで接種できたのは、岩手県あげて取り組んだ成果だと思う。
- 気になっているのが、この地域で周産期医療をどうしていくかということ。今年の４月に産科をやめて婦人科のみとなった開業医があったと聞いた。奥州市に住んでいると、磐井病院や中部病院などに行かないと子どもが産めない環境であることを憂慮している。子育てする環境の整備をするのはいいが、その前段で結婚支援をして結婚する人が増えても、子どもを産み育てるための医療の面が担保できなければ、この地域で生活する若者が安心して健やかにいきいきと暮らせないのではないかと思うので、県としても市町村を支援しながら、この圏域で安心して子どもを産める環境づくりについて御支援いただきたい。

［小川参事兼保健福祉環境部長］

・　産科医の確保は岩手県全体でも非常に厳しい状況にある。周産期医療は県内を４つに区切っており、県南地域は中部、胆江、両磐が１つになって医療提供体制を組んでいる状況。胆江地域については、地域周産期母子医療センターがないということもあり、各市町からも、周産期医療の連携体制等について御意見をいただいているところ。産科医の関係もあるので、直ぐに解決できる方法はないが産科医を養成・確保しながら、県でできることと市町にできることを情報共有し、取組を進めているところ。一朝一夕で解決することは難しい案件だが、県としても市町と一緒になりながら対策を進めていきたいと考えている。

［千葉稔委員］

・　土砂災害警戒区域の指定は順調なのか。今年度中の指定284箇所のうち奥州市が多いので気になっている。住民の方に少しでも防災・減災について理解してもらうことが重要なので、引き続き取組の推進をお願いしたい。

・　今年７月３日に発生した、静岡県熱海市伊豆山地区土砂災害の原因が、盛り土であるといわれているが、盛り土問題について、災害発生を受けて何か県として取り組んだことはあるか。

［佐藤土木部調整課長］

・　県内の土砂災害警戒区域は土砂災害・地滑り・急傾斜を合わせて13,316箇所ある。これらの箇所については、県民に周知するために、土砂災害防止法により指定の手続きを行っており、令和３年９月末時点で11,248箇所の指定を完了している。現在残りの箇所については、一関55箇所、奥州229箇所の合計284箇所を今年指定すれば、県南管内の指定箇所は3651箇所がすべて完了になる。ただし、指定箇所については、５年ごとに見直しをするので、引き続き調査し、危険個所は指定していく。指定の際は、一方的に指定する訳ではなく、住民説明を行い、指定の重要性や災害発生時にすべきこと等、説明を交えながら指定に御理解いただき、市町村の意見を踏まえたうえで進めていく。

・　災害発生後、砂防災害課より盛り土の許可を行っている箇所の調査の指示があった。管内を調査した結果、大きな災害が発生する案件はないということで報告している。

［千葉稔委員］

・　資料NO.４令和４年度県南広域振興局の取組方針(案)について、「２　快適で安全・安心な生活環境をつくります」に防災・減災対策が記載されていない理由はなぜか。防災・減災が明記させることによって、意識づけになると思っている。削除したのか、別の場所に記載されているのか確認したい。

・　「３　一人ひとりがいきいきと生活できるコミュニティをつくります」の地域の国際化について、医療通訳スタッフの育成とあるが、防災の一つとして避難所対応ができるスタッフを、連携して育成していければ、外国人が増えていることに対応できるのではないかと思う。実際外国人が安心して避難できる体制までには至っていないのは承知している。避難所に来た外国人の面倒を見るスタッフの育成を視野に入れて何かできないか考えている。

［佐藤経営企画部長］

・　防災・減災の文言については、事業が固まっていないところがあり記載されていない部分があるが、事業の検討の中で入れられる箇所に記載したいと思うので、御理解をお願いしたい。

・　避難所の外国人向けスタッフの育成について、現在、奥州市から来年度の事業に向けて御相談いただいているところ。その中で、色々相談しながら事業化できるところは事業化する形で進めていきたいと考えている。

［浅沼副局長］

〈藤原朝子委員からの書面での御意見を紹介〉

・　児童虐待の関係。出産後、乳児検診など健康管理をする場で、保健師と話をする機会があるが、その際に親に対するカウンセリングを必須には出来ないものか。非常に子育てに悩んでいる方々が多く、自分を追い詰めてしまう人や他の人と接する機会が失われている人もいる。そういった方に気持ちの持ち方や対処法を学べる機会を作ってほしい。

［小川参事兼保健福祉環境部長］

・　虐待の発生予防、早期発見、相談機能の充実に係る御指摘だと読ませていただいた。県では児童虐待防止アクションプランを掲げており、これらの３つは、４つの柱のうち３つに該当している。現在市町村では、乳幼児健診の際に、母親の体調を精神的な部分を含めて確認していただいており、相談窓口も設けている。気になる子供がいると協議会やケース検討に進むような体制で進めている。これらを県では支援する形で取り組んでいる。相談件数等が増加傾向にあり、大きな課題の一つと捉えているので、市町や学校等の関係機関と連携しながら引き続き取り組んでいきたい。

［小笠原隆委員］

・　人材育成について、どの分野についても、人材が不足しているというのが課題となっているが、これに対して具体的に何をどう進めていくのかが見えてこない。先日岩手県から依頼され、県立大の教授や大きな法人の施設や事業団の方との、人材育成に係るシンポジウムを開催したのだが、単体の法人だといくら努力しても限度があるということが分かってきた。県立大の教授からは、「来年度からはそれぞれが連合できるような形の、一般法人を作れるような仕組みが出来るのだが、専門の行政職の指導やＰＲがもっとあったほうがいい。」とのご意見をいただいた。その通りだと思いながら話を聞いていた。

・　福祉職を目指す学生がそもそも減っているようだ。だとすると、いくら人材確保しようとしても基盤が脆弱になってきているといわれている。それに対し、具体的に話し合う場やアイデアを出し合う場があればいいと思う。金ヶ崎町等から意見をお願いされたときに、具体的に意見を挙げさせていただいたが、アイデアを出しても公に話をする場所がないため、そういった場を作っていただきたいとお願いをした。広域的な側面での連携を取りながら、話し合いやアイデア出しをする場所を作っていただきたい。

［小川参事兼保健福祉環境部長］

・　福祉人材の確保については、イメージの改革も含め、やっていかなければいけないと考えている。振興局でも、市町の自立支援協議会に参画させていただいているので、合同の会議体を考えてみるのも１つの手と考えている。集まって、議論して、情報共有する場が大事だと思っているので、引き続き一緒に考えていきたい。

◆基本方向Ⅱ「世界に誇れる産業の集積を進め、岩手で育った人材が地元で働き定着する地域」

［小野仁志委員］

・　これからの時代、ＩＴを企業に導入しなければいけないと思う。有効求人倍率が上がって、人手不足の状態が続いており、各地域では人口減少が進んでいることを考えると、自ずと企業は人に代わるシステムを導入しなければいけない、という風に変わっていく時代がそこまで来ているのではないかと思っている。関東からではなく、地元でのＩＴエンジニアの人材の育成と、働く場所の提供に取り組んでいけないかなと考えている。

・　就職氷河期世代に対する、人材の確保や人材の育成、訓練を広域的に進めていきたい。それに関わって、Ｉターン・Ｕターン等の移住との絡みもあると思う。移住ツアーなど各市町村でやっているが、「実際にどういう風に働きたいのか」、「どういう職場があるのか」などという、職と働き方を結び付けないと、なかなか移住の方向性が見いだせないというところがあるので、そこを上手く絡めて進めていただきたい。

［熊谷特命参事兼産業振興室長兼産業振興課長］

・　ＩＴは、これまで1つの産業分野だったが、ＩＴ、ＩｏＴ、ＡＩの進化に伴って、様々な分野の基盤技術になっている。それに特化した人材育成というところで考えると、例えば、管内では、北上のコンピュータ・アカデミーやいわてデジタルエンジニア育成センターなどで育成をしている。学校教育の中でもＩＴに関心をもつ生徒を増やせるようニーズが出てくると思われるので、出前授業等も検討しなければいけないと考えている。一方で、企業人の人材育成としては、生産性の向上を進めていけるような人材をものづくりの中で育てていくためにはどうしたらよいか、これから皆様の声・ニーズを聞きながら一緒に考えていきたい。

・　移住について、氷河期世代の方も含め、今年度10月末で実施したセミナーのなかで、「住みたい」の思いと併せて働くことをイメージしてもらうために、今年度はキオクシア岩手にゲストで出ていただき、岩手にはこういう企業があることをアプローチしたところ。そういった発想をふんだんに入れながら今後も取組を進めていきたい。

［浅沼副局長］

・　広域振興局としても、人口減少対策に取り組む上で移住定住は重要であると考えており、来年度の事業に向けてどういった取組が良いか中で話し合っているところ。広域的に市町村をサポートするような体制づくりを考えている。正式に予算が取れれば、皆さんにお知らせさせていただきたいが、取組を強化したいと考えている。

［堀内恵樹委員］

- キャリア教育サポーターをさせていただいており、新型コロナウイルスの関係でなかなか学校に話に行く機会がなかったが、就職が近くなった時に面接の手伝いをさせていただいた。県の就業支援員が頑張られていて、生徒も面接に対する姿勢が立派になって素晴らしいという印象を受けた。その反面、面接練習が就職するためだけの練習のような感じになっている、この後の、仕事を続けていくことの意義などをもう少し生徒に理解してもらうと、仕事に対しての意欲は続いていくと思う。就職した後についてのフォローがあれば良い。
- 小学校に行って話をさせていただいた際、一緒に話をさせていただいた企業さんも、素晴らしい技術を持った部分を説明されていて、地元でこんなに素晴らしいことをやっているのだと微笑んでいる生徒も見受けられた。地元で従業員を募集してもなかなか集まらないということもあるので、せっかく県南広域振興局の皆さんも進められているところなので、もっと地元の企業の良さを生徒に伝えていただきながら、定着して仕事を続けていく部分について、支援をしていただけると大変ありがたい。

［熊谷特命参事兼産業振興室長兼産業振興課長］

- 面談については、就業支援員もかなりベテランになっており、決して就職するためだけの面談にはならないようにと情報共有しながら行っている。学校の先生方にそのような意識を持っていただきたいと考えており、企業さんから「就職試験の時だけ良いこと言っていたけれど、そのあとが駄目だ」と言われないように、例えば職業観や勤労観を面接練習の時に伝えられるように共有させていただいている。

  このほか、就業支援員等による面談やガイダンスの際などの複数の機会をとらえて、生徒に仕事を続けていくことの意義を伝えており、今後も実施していく。
- 地元の企業に人が集まらないという話はよくいただいている。地域企業向けに採用力を向上するための研修ということで、学生に就職試験を受けてもらうために、どうやったら企業の魅力が伝わるかという研修を行っている。さらに、地域の企業の若手社員に出前授業をやっていただくことで、年が近い先輩からの共感できる体験談により、地元の魅力を感じていただければと思っている。

◆基本方向Ⅲ「世界遺産「平泉の文化遺産」をはじめ多彩な魅力の発信により多くの人々が訪れる地域」

［長屋あゆみ委員］

- 今から話すことはスポーツに特化したことではなくて、まとめた形でお話させていただきたいと思っている。
- スポーツのこともそうだが、就職の機会を設ける、いずれ地元で働いてほしい、戻って来て欲しいというなかで、地元への愛着が育まれているだろうかと思っている。特にコロナ禍なので町のお祭りもなく、地域の子ども会も機能しておらず、ますます学校と習い事のみの中で育ってきている子どもたちが、絶対岩手で働きたいと思える要素は何か。そこからやっていかないと、いくら機会を設けてもいけないのかなと思う。
- いいと思うのが県南レジェンドランナーズ。マラソンを推しているのだと思っているが、そうであれば、マラソンと食を必ずセットにしてやっていく。例えば、いわて銀河100kmマラソンで東京の団体をサポートしたりもするのだが、なぜここに来るのかというと、「ここに行くとこの食べ物が食べられる」「ここのエイドではこれが食べられる」というのを楽しみにして来ているということだった。そして「景色も素晴らしい」「こんなに素晴らしいところがあるのを知らなかった」ということで、一度参加された方はよほど懲りない限りは来ていただける。例えば、そこに、子どもたちが関わる機会を設けるとか、応援で旗を作るということはやっていると思うが、私からすると作りっぱなしじゃないかなと思う。それが実際どういう風になっていて、「こうやって自分たちの想いが形になっているのだ」という実感というのも、これからはもっと作っていってほしい。また、地域の方にも、積極的に、「通りかかったらタオル振ってね」といった形で、年配の方から子どもたちまで、気軽に手を振っていいんだよ、応援していいんだよ、ということをもっとアピールした上で、皆で盛り上げるというのを、走る人とエイドの人だけで運営するのではなく、皆を巻き込むように仕組み作りしていかないと、せっかくいいコンテンツがあるのに勿体ないなと思う。
- スポーツに関しては、応援するのも、観るのも、やるのも全てスポ―ツなので、地元にはこんな誇れるスポーツがあるとか、町をあげて応援するんだよという地域と人の関わりと、おもてなしを兼ねた形で「岩手っていいな」と思うような機会作りを上手く絡めてほしい。
- 以前、県立病院に土曜日親子で招待されて行った。全部の科を回って、診察しているところを見たり、若手の先輩からどうやってここを目指したか、お金はどうやって工面したかなどを聞いたりした。お金があるから医者になれるのではなくて、志さえあればできるよという、とてもかけがえのない授業を半日かけてしていただいた。「お金持ちじゃなくても医者になれるんだね」という学生たちの話を聞いたとき、敷居が高いと思っている人もいると思った。

  例えば保育士にしても、保育園で子どもを抱っこしてみるとか、触れるとか、実際に体験してみて、その中で地元で何がやりたいか、地元ならではの保育士さんの特徴があると思う。東京の保育士と地元の保育士とでは、風土や気質など違うと思う。岩手で、県南で保育士をやらないか、医者をやらないかといった種まきも今の時期にやっていかないと、結局東京や仙台に行ってしまうと思うので、何かスポーツや食の文化など、限られた中でも種まきをするという仕組み作りをトータル的にしていけたらいいのかなと思う。
- 交流人口の拡大ということで、進めやすいのがマラソン大会なのだと思うが、県南にはもっとスポーツがあるでしょうと思う。例えばスキー場や奥州のカヌーなど、この地区のこの景色だからというのをもっとやっていかないと。マラソン大会は、全国各地でやられているので、他の市町村や都道府県も同じように推してくる。「岩手のこの景色とこの人と食べ物と」といったアピールをすると同時に、地元の人にも知らしめてもらうために、自治会を巻き込むなどきっかけづくりをしたり、分野ごとの横のつながりをもって、もっと絡めてやってもらいたい。

［佐藤経営企画部長］

・　地元への愛着の部分だが、例えば、企業見学や出前授業は小学校から学校単位で実施している。また、平泉では平泉学という形で地元への愛着を育む授業をしていただいており、各地で色々と地域を知る取組を進めているところだが、それらをさらに進めていくとともに、委員から御指摘があった通り、横の連携として色々な分野で、色々な取組があるので、そういったものを出来るだけ集めて、横串を通して一緒に出来ないかと考えている。お話しできる段階になったら皆さんにご説明できればと思っている。

・　いわて県南レジェンドランナーズについて、昨年度と今年度はマラソン大会がコロナの影響でほとんど開催できなかったというところもあり、観光スポットや食とも絡めた企画をオンラインで開催させていただいたところ。各市町のマラソン大会が終了するところもあるが、連携させていただきながら、もちろん地元の人達を巻き込む形で、どう広げていくことができるかについても、市町が参加する会議等で検討していきたいと考えている。

［南洞法玲委員］

・　コロナ禍ということもあり、観光に関してはかなりの打撃を受けているところではあるが、何とか秋になって、団体のお客様に来ていただくようになり、関東方面から修学旅行生も多数来ていただいている。県の職員や東京事務所の皆さまの努力の賜物だと思っている。先日、10月23日に、毛越寺を会場にリモート観光ツアーが行われた。企業と県南地域の観光地をリモートで繋ぎ、大学生協と協力して、大学生に岩手県南をアピールする取組だったのだが、大変良かったと思っている。元々はリモートではなく、実際に学生さんに岩手県南に来ていただいて企業訪問を行う予定だったと聞いていたが、そうするとやはり限られた人数に対するアピールになるのかなと思う。今回はリモートツアーとして、全国の学生生協で学生の参加を募ったところ、参加者は160人を超え、多くの学生にアピールすることができた。さらに、わたしが知らない企業が沢山あるのだということが分かったし、企業の取組、企業を継いだＩターン、Ｕターンした方の生の声を聴ける機会は学生にとってとても刺激的だったようだ。実際、リモートなので、すぐに学生たちの反応が返ってきて質問が来る、そこに企業が答える、そういった対学生とつながる機会はなかなかないのかなと思うので、この取組はぜひ次年度続けていただきたいし、年１回ではなく何回かやっていただくとアピールできると思った。その中で、もっと産業の部分もアピールできればより良いと思う。まずはお客さんとして学生たちが県南地域に来ていただいて、「良いところだな」と思って、そこで戻ってきていただいたり、就職しに来てくださったりということになるのだと思う。そこにつながっていく、良い機会だと思う。リモートツアーを行って、さらにそこで強く興味を持った方たちは、実際足を運んでもらうような、一段階二段階のような形で取り組んでいただけると、より強くアピールできるのではないかと思った。ぜひ今後も、毛越寺も格式高いと思われてしまうところもあるので、もっと地元の方々と交流しながら平泉をＰＲしていければと思っている。

［熊谷特命参事兼産業振興室長兼産業振興課長］

・　リモート観光ツアーに御協力いただき、感謝申し上げる。実は元々は、下町ロケットのイメージで、岩手県のものづくりを知ってもらいながら、観光ツアーをというものだったが、コロナウイルスの影響で、移動が難しいとのことで、大学生協と打ち合わせを行いリモートに切り替えたもの。様々な大学の学生と繋がりができて、160人も御参加いただき、良かったと思っている。来月大学生協事業連合を訪問して、今年度の振り返りと来年度の実施について話をする予定。今回できたつながりを大切にして、先方のニーズにも耳を傾けながら練り込み、ひいては、移住・定住の取組とうまく連動させて、繋がっていければいいと思っている。大事なのは、繋がりをもってしていくことで、沢山の人に観光や移住・定住を広げるネットワークができると思うので、そこを大切に様々活用していきたい。

［高見章子委員］

- リモート観光ツアーに参加させていただいて、ものすごくいい企画だなと思った。１年に１度だけといわず、複数回実施して、その季節を楽しんでいただけるように企画していただきたい。
- 資料No. ２の18ページ②の部分の、食品の輸出拡大に係る事業について、大変興味を持っている。大手の全国区の輸送会社ではなく、地元企業を使っており、地元の企業を包括して行う事業で凄く良いと思っている。実際、輸出の時、特に中国を視野に入れたときに苦労しているのが商標登録のところ。費用もかなりかかり、中国だと代理人を立てなければいけないということもあるので、商標のところもサポートしていただけると良いと思う。
- 旬彩ごほうびフェアについて、進捗状況が順調となっているが、評価基準は何なのか。コロナ禍において、多くの飲食店が疲弊し、お客さんが来ないと困っている中でのフェア開催だったと思うが、果たして順調だったのか疑問がある。

［熊谷特命参事兼産業振興室長兼産業振興課長］

- リモート観光ツアーについて、御協力いただき感謝申し上げる。年複数回開催して欲しいという声があったことを強く受け止めたいと思う。
- 輸出事業について、商標登録のサポートをという声があったが、県の産業経済交流課や産業振興センター等と連携しながら、そのような視点を持ちながら取り組んでいきたい。
- ごほうびフェアの進捗について、こちらは取組指標ということで、何社に協力いただいたかというのも大事だが、従来の西和賀町・金ケ崎町・北上市の３市町から広げられないかということで、他の市町の食産業者にも広げたところから順調と評価したところ。ご指摘の通り新型コロナウイルスの影響が食産業にも及んでいるという部分では、順調ではないのではないかという御意見はごもっともだと思うが、指標というところではそのような意味で書かせていただいている。

［浅沼副局長］

- 資料には第２四半期の時点の進捗を記載しているが、旬彩ごほうびフェアは10月の開催ということで、この時点では準備を進めている段階であった。実際にどれくらい集客されたかはこれから集計させていただいて、それが目標に届いていなければ「遅れ」という評価に変わっていく可能性はある。

［千葉哲夫委員］

- 先月20日に、平泉世界遺産ガイダンスセンターが開館した。私たちガイドの会は、11月11日に内覧会ということで招待され、館長から１時間ほど説明を受けた。大変素晴らしいガイダンスセンターなので、ぜひ岩手県民には１回から２回行っていただきたい。平泉はこのように素晴らしいところなのだというところを、ガイドの会としても皆さんに説明しながらやっていきたい。残された遺産もあると思うので、是非登録に向けて進めていってもらいたい。全国へのＰＲもこれから進めていただきたい。
- 一関・平泉地方のもち食文化をもっとＰＲしてほしい。餅だけでなく、餅に合うレシピも、400種類以上の農産物を使っているということもあるので、併せてＰＲしてほしい。
- 一関の観光協会では、コロナ禍の中で、マイクロツーリズムということで、一関市の補助金等を活用し、様々取組を進めている。いわて旅応援プロジェクトやいわての旅クーポンなども盛んに行われているので、この機会に、観光客がどんどん来ると思うのでその準備が必要だと思う。

［浅沼副局長］

- 平泉世界遺産ガイダンスセンターについて、非常に良い施設だと思っている。たっぷり時間をかけて見るに値する施設だと思うので、委員の皆様の中で、これからという方がいればぜひ見に行っていただければと思う。施設をどうやって活用していくかについて、所管している文化スポーツ部や平泉ガイダンスセンター、さらには関係市町や関係団体とで構成する世界遺産保存活用推進協議会のメンバーと議論を行っていきたい。同センターを平泉の玄関口だと捉えているので、様々な場面でＰＲさせていただきたい。
- もち食文化は、ユネスコ無形文化遺産の中に含まれているので、１つのコンテンツという形で、食による交流人口の拡大につながる素材として活用させていただきたい。
- 観光の情報発信について、平泉世界遺産登録10周年ということもあり、力を入れて取り組みたいと思っていたところ。東北デスティネーションキャンペーンもあったので、本来であれば力を入れて全国に発信したかったところだが、なかなか新型コロナウイルスの影響で出来なかった。来年度、アフターＤＣ及びJR東日本の重点販売期間になるので、県庁の観光・プロモーション室と連携しながら、やはり岩手県のキラーコンテンツと言われているのは平泉であり、県としても重要視しているので、しっかりと県庁と連携しながら、県南広域振興局は地域の新しいコンテンツや知られていないコンテンツを探して取り組んでいるので、オンラインツアーと併せて進めていきたいと思っている。

［堀内恵樹委員］

- 旬彩ごほうびフェアについて、弊社も協力させていただき料理を提供させていただいたが、素晴らしい企画だと思うが一般の方はまだまだ知られていないのが非常に残念に思った。今後も続けていくという話になったが、出来るだけ地元の食材を、地元の皆さんに知っていただきながら楽しんでいただけるように進めていただきたい。
- 先日、西和賀町でツアーを行ったようだが、このツアーが食クラネットに入っている委員ですら情報が伝わっておらず、集まりが悪かったということがあるようだった。もう少し横の連携が取れると、より会員の皆さんが協力できると思う。今回、新型コロナウイルスの影響で集まりも少なかったし、情報交換会もなかったという事情もあるかと思うが、その部分を課題にしていただいて、もう少し広げていただけると良いと思う。

［熊谷特命参事兼産業振興室長兼産業振興課長］

- 当時は、フェアの開催が出来ないのではないかという心配がある中で準備を進めていた。結果的には開催した時期が、感染者が収まってきた時期にあたっていたので良かったが、当時は積極的にＰＲすべきか悩んだところもあった。コロナが落ち着いていけばもっとＰＲして、観光のような他のコンテンツともコラボしながら進めていきたい。
- コロナ禍でも、情報共有は強化できるので、しっかり強化してやらせていただきたい。

◆基本方向Ⅳ「米・園芸・畜産や林業などの多様な経営体が収益性の高い農林業を実践する地域」

［佐々木勝志委員］

・　いわて型野菜トップモデル産地創造事業の方でお世話になっていた。今年で３年目となり事業は終了するが、引き続き指導いただけるとありがたい。
・　10月末に、農水省に肥料メーカーや商社が呼ばれ、隣国が輸出規制をかける影響で、肥料が手に入りづらくなるとの話を受けた。２、３年前から価格が1.5倍ほどになっているため、コントラクターの強化、マッチング支援、少ない肥料で行う新しい技術体系の指導等をお願いしたい。
・　畜産について、ＪＡや協会が広域になりすぎて、獣医や受精師の数が足りないと感じる。仕事をしている時間より移動時間が多いのが現状なので、是非県でも支援や指導していただければ助かるのでお願いしたい。

［高橋副局長兼農政部長］

・　大変御協力いただきながら進めていただいた。事業は期限があるが、県内にモデルを作って波及させていく取り組みを引き継ぎ進めていくので、よろしくお願いしたい。
・　資材について、国の方でも様々な支援策を検討していると聞いている。一方で、国の新しい施策として、「みどりの食糧戦略システム」ということで国際的な環境持続型の産業を進めていくことで、農林水産業のそういった視点で進めていく必要が迫られているところ。農林水産省はそういった視点を施策として新たに打ち出しているところ。その中でも、有機農業の技術も将来、2050年には50％を有機農業での生産にシフトしていくという話も出ている。そういった流れがあるので、是非技術体系も含め、環境に負荷がかからない、できるだけ資源の枯渇につながらないような形での農林水産業という方向性の中で、技術開発も進めていくので、県もしっかりと取組を進めていく。
・　県も民間も含めて、獣医師等の確保に非常に苦労しているところ。確保に向けて、関係の大学に足を運んで、獣医学部の学生に働きかけをしているが、特効薬がないのが現状。移動時間が長いのはその通りなので、例えば効率的に業務が進むようなやり方等を一緒に考えていきたいと思う。

［安倍和明委員］

・　松くい虫やナラ枯れが問題になっている。岩手県では６月～９月はアカマツが伐採禁止となっているが、他県ではこのような規制がない。林道や作業道を車で走っていると、風が強い日では枯れた松が落ちてくることがまれにある。山形では、キノコ採りの時期に木が倒れてきて、死亡したケースがあったそう。特に県南地域の平地のアカマツは、どんどん伐採して、広葉樹林化あるいは樹種転換をしていくのが良いと考えている。
・　林業は非常に重篤な労働災害が多い。特にチェンソーで伐採する際に、重篤な事故が発生している。どうすればこのような事故が無くなるかを考えたときに、教育を受けていない知識の浅い人がやることで起きるものと、ベテランが手を抜くことで起こるものがある。伐採についての知識は、林業アカデミーで勉強することができるが、そこの伐採のカリキュラムが少ない感じがする。様々な理由によるものかもしれないが、各事業体を周って歩いて、どのように伐採するのかを力を入れて勉強していく必要があると思う。
・　林業機械メーカーとの交流を、もう少し進めていってほしい。交流を図ってお互いに提言し合えれば良いと思う。
・　ウッドショックが続いており、木が入りにくい、木製品の値段が上がっている。今年の４月から素材の価格が10％くらい上がっている。しかし、素材業者が利益を出しているかと言われれば、必ずしもそうではなくて、入札で立ち木を買う際に、予定価格の150％近くの値段で入れていく人がいるので、なかなか落札できない。なんとかならないかと思っている。

［及川林務部長］

- アカマツの樹種転換をはかった方が良いとのお話だったが、その通りだと思う。伐採制限について、６月から９月まで伐採をしないというのは、その時期に伐採をすると松くい虫被害が伐採木を介して広がるので、それを防ぐために制限をしているもの。それ以外の期間で、アカマツをしっかりと伐採をして、樹種転換を図っていくのが一番の対策だと考えている。その一方でどうしてもマツを守らなければいけない場所もある。例えば毛越寺など、そういったところのアカマツは守りながら、それ以外の場所のアカマツは活用していくのが最も望ましい形だと考えている。しっかりと適切な時期に対策を講じていきたい。
- 林業の労働災害は、非常に重篤な被害になり、今年に入り死亡事故が県内でも４件あったということで、問題になっている。林業のアカデミーの伐採のカリキュラムについて、１年間のスケジュールの中で時間配分が十分とれないということがあるかもしれないが、それぞれの事業体の中でお互いにどんな作業をしているのかを確認し合うのはいいやり方だと思う。建設工事などでも安全パトロールということでお互いの現場を見るという機会があり、そのようなことを林業の中でも行うことは効果があると思うので、参考にさせていただく。
- メーカーだけではなく、それぞれの違ったメーカーとも、技術的な交流を行い、さらにレベルアップを図るという趣旨の御意見だと思っている。いずれにしても、まずは現場の声を聴いて、意見を集約して、機械メーカーに提供していきたい。
- ウッドショックについて、丸太の価格が10％ほど上がっているが製品価格は２倍近く高くなっている。丸太も同じくらい上がってもよいと思うが、そのような丸太の価格は低く、製品は高いということで、丸太を購入する皆さんは、これまでよりも高めでもできるだけ丸太を買いたいという意識が働いている。そのため入札に参加すると、思ったより高くて買えないということがあると思う。この状況がずっと続くかどうかは不透明だが、県行造林の入札ということであれば、出来るだけ多くの皆さんが入札できる機会がもてるように対象地の調査を進めていきたい。